

30年の歩みを次代の礎に



国際交通安全学会副会長 小口泰平

時の経つのは過ぎてみると早いものです。当学会は、その時代の自動車交通と安全、モビリティ社会の課題と将来のあるべき姿を求めて、専門分野を越えて多くの方々が集い、学際的・実地的・国際的な取り組みを大切にしながら30年の時を重ねて参りました。

しかし事は決して容易ではなく、新たな課題が現れてきます。詩人であり評論家であったハイネの「どの時代にもそれぞれの課題があり、それを解くことによって人類は進歩する」という言葉のとおり、課題の追求はどうやら世紀を越えて永遠のようです。

学会設立当初をふり返ってみますと、分野の異なる会員がまずは研究課題を共有することに焦点をあて、「数寄屋橋交差点の研究」「暴走族問題の研究」が主要研究テーマとなりました。時には専門分野の概念規定の違いに気づくまで議論に明け暮れ、時間を忘れて終電に乗り遅れることもしばしばでした。

こうした草創期を経て、目的主導の実践的な研究調査の確かな道が拓かれたのです。学会の機関誌では、学際研究の意義やその具体的な研究手法など、その議論は收拾がつかないほど活発なものでした。編集にあたっては、既存の枠に捉われることだけは避け、高い志をありのまま掲載することに努めたことを思い出します。やがてさまざまな自主研究の成果が発表され、社会的に認知されるようになり、受託研究も年ごとに増え始め、また交通問題のプロフェッショナル集団として認識されるに至り、テレビや新聞などのマスコミから当学会の知見が折りある毎に求められるようになりました。

その後、研究調査やシンポジウムの内容はいつその広がりを持つとともに、出版や褒賞への社会的期待も高まり、さらに国際的な活動の基盤づくりとその展開が積極的に行われるようになりました。国際シンポジウムの一つであるISSOTは国内開催にとどまらず、海外にその場を拡げて開催されています。1985年のIATSSフォーラムの設立は、文字どおり国際的な活動の旗艦として今日に至っています。

こうした30年の活動は、改めて述べるまでもなく多くの方々の熱意そのものであったと言えます。今、その心と知と技をこれからの新たな活動の礎として生かしてゆくことの大切さを、改めて認識している次第です。